越後北部の中世陶器窯

鶴巻　康志（新発田市教育委員会）

１．はじめに

新潟県の北部、阿賀野川の北側は「阿賀北（あがきた）（揚北）地方」と呼ばれ、中世の有力在地領主が割拠し、国府からも離れているため、独自性の強い文化を持っていた。この地方で中世陶器窯が営まれていたのも、その歴史的な背景が影響しているとみられる。

２．研究史

1980年の吉岡康暢氏による珠洲焼編年提示以来、東北地方の須恵器系の中世陶器の様相が徐々に明らかにされ、これらはいずれも「珠洲系」として捉えられ、個々の地域で出土する須恵器系の中世陶器が「珠洲焼」か、地元産なのかで議論が続いた。胎土分析の結果や、地方窯の編年研究の進展により、東北地方日本海側には珠洲Ⅰ期～Ⅲ期に並行する須恵器系中世陶器窯が認められるものの、消費地遺跡で出土する製品の多くは珠洲焼であるという評価が定着した。

３．新潟県の中世陶器生産と流通

新潟県北部の中世窯跡群は「北越窯」・「五頭山麓窯」・「笹神窯」と呼ばれ、遅くとも13世紀前半には須恵器系窯として成立した後、13世紀の中頃に瓷器系窯へと転換する。陶器窯は、新発田市から阿賀野市にかけて連なる五頭連峰の前山にあたる丘陵地帯に分布する。中世陶器窯は須恵器系２、瓷器系５遺跡がある。

a）須恵器系中世陶器窯

北沢１～５号窯・背中炙（せなかあぶり）窯がある。製品は片口鉢の内面に鋭利な櫛状工具によって施された振幅の大きい擂目から、珠洲Ⅱ期に並行する年代が与えられている。北沢窯→背中炙窯の時期差を想定でき、いずれも大枠では珠洲Ⅱ期に対比できるため、13世紀前半頃に比定される。

珠洲の片口鉢・壺Ｔ種、壺Ｒ種に対応する器種が主体である。北沢窯では、ほかに浄瓶・陶硯が生産されている。片口鉢は珠洲と異なり、陶片を挟んで重ね焼きするため、内外面に目痕が残る場合がある。

b）瓷器系中世陶器

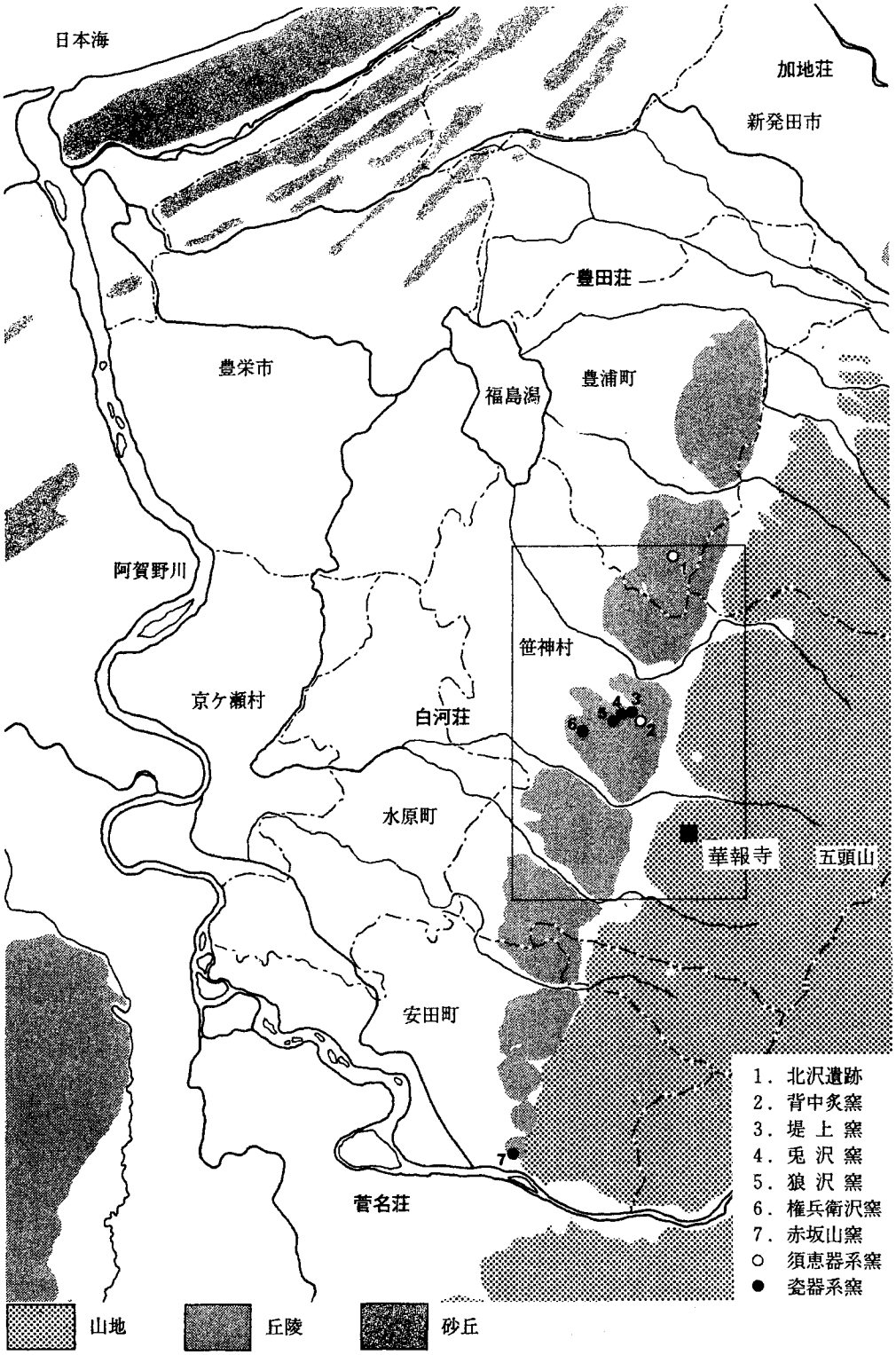
権兵衛沢１号窯、狼沢１号窯、兎沢窯・堤上窯・赤坂山１号・２号窯がある。甕類の口縁形態が受口状、Ｎ字状で、押印の施文位置が肩から胴にかけて多段に施される権兵衛沢段階（権兵衛沢１号・赤坂山２・１号）と、甕の口縁部がＮ字状のみで、押印は肩もしくは胴部に１段のみ施される狼沢段階（狼沢１号窯・兎沢窯・堤上窯・赤坂山２号窯の窯体埋土）に区分される。器種は甕・壺・鉢が主体である。前者は常滑５型式、後者は常滑６a 型式に対応している。

c）製品の流通

製品は新潟県北部を中心に分布するが、消費地遺跡での陶器組成に占める割合は低い。また、近年の研究では、山形県内の内陸部の遺跡で瓷器系の製品が確認され、越後国外にも流通していたことが判明した。

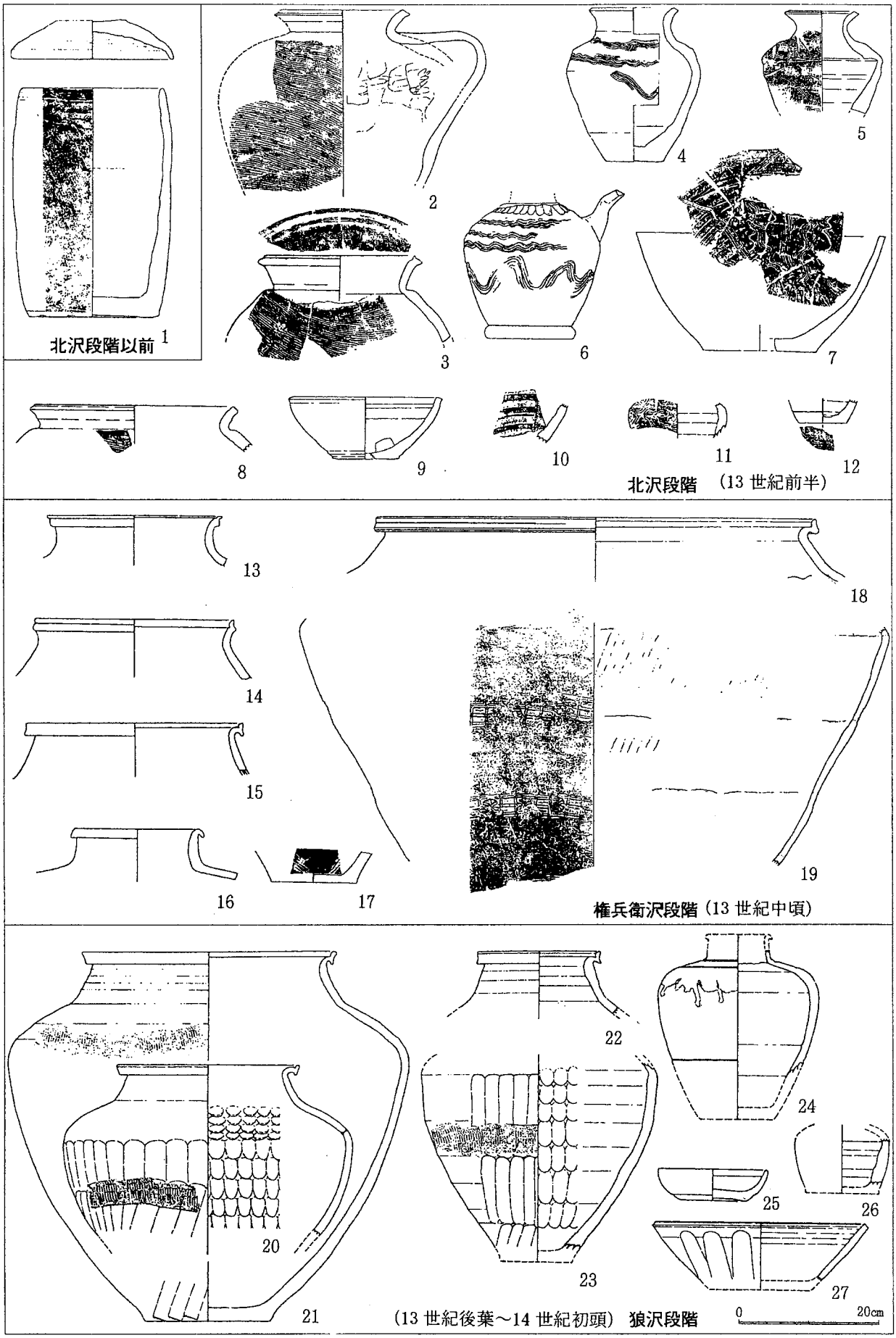
参考文献

鶴巻康志2005「新潟県北部の中世陶器窯」『全国シンポジウム中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集』

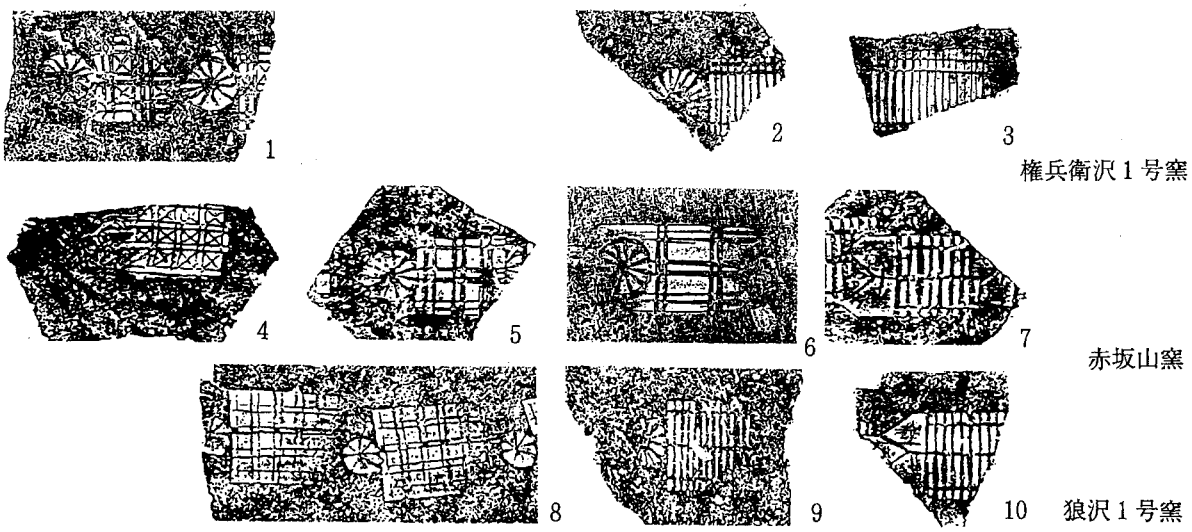


第１図　陶器窯の分布と周辺の地形（１／15万）（鶴巻　1996）

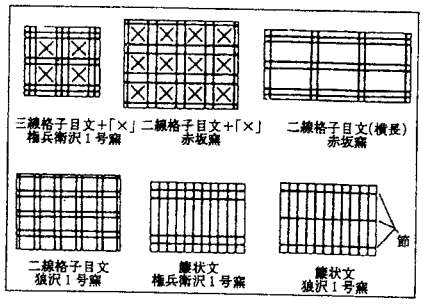
次ページ編年表で使用した実測図の出展は以下の通りである。１安田町横峯１号経塚〔安田町教育委員会1979〕、２～７豊浦町北沢１号陶器窯〔豊浦町教育委員会1992〕、８～12笹神村背中炙窯〔吉岡1994〕、13～17笹神村権兵衛沢１号窯〔中川ほか1970〕、18安田町赤坂山窯〔渡辺1978〕、19安田町六野瀬遺跡１号井戸出土赤坂山窯製品〔安田町教育委員会1992〕、20～27笹神村狼沢１号窯〔中川ほか1973〕



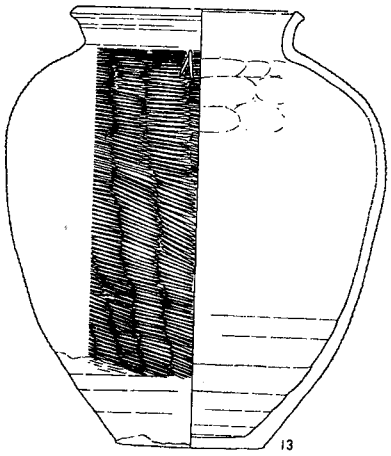
第2図 北越窯編年図（鶴巻 1997）



第３図　各窯の押印（鶴巻　1996）



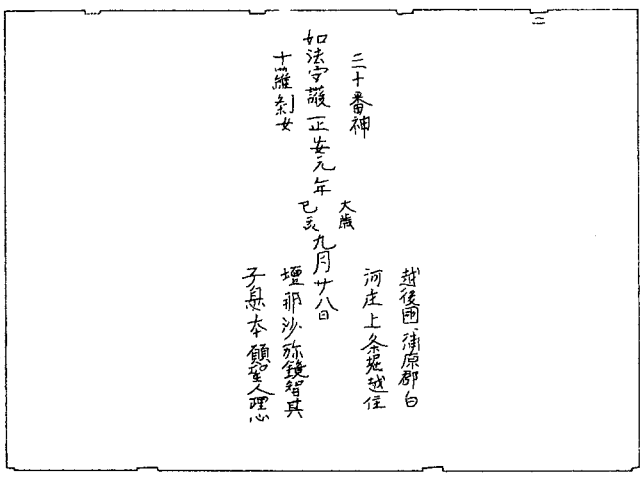
押印文の基本パターン（鶴巻　1991）

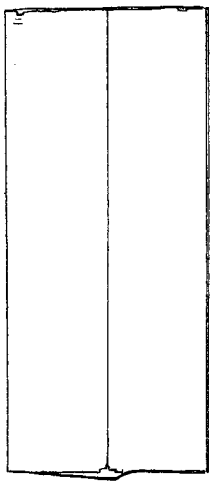


華報寺　目洗沢出土中世陶器

0　20cm

（珠洲壺Ｔ種はⅣ１期基準資料・瓷器系鉢は狼沢段階）





銅製経筒

0　10cm

第４図　記年銘資料（吉岡　1994）